
ハヤテのごとく！～愛沢家執事物語～

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！～愛沢家執事物語～

【Nコード】

N7554Y

【作者名】

那家乃ふゆい

【あらすじ】

大阪でも屈指の大金持ちである【愛沢家】。そこには、毎日のようにお転婆お嬢様に手を焼く、一人の執事がいた。家族を失い、養子として愛沢家に引き取られた彼は、今日も変わらずいつものように関西弁お嬢様と新たな笑いを求め奔走していく。……これはそんな彼と周囲の人が織りなす、コンバットバトラーストーリーである。

第一話 関西人はツツコミが激しい（前書き）

こんにちは。ふゆいと申します。

今回は未熟ながら【ハヤテのごとく！】の二次創作です。まだまだ新米ですが、精一杯努力していこうと思います。暖かく見守ってくださいと嬉しいです。

それでは、お楽しみください。

第一話 関西人はツツコミが激しい

物語には常に始まりというものがある。

悲劇であれ喜劇であれ、それを切欠にして物語は進んでいく。始まりがない物語は、進展していくこともない。それは、人間関係にも言えるであろう。

人生のターニングポイントには、確実と言ってもいいほど特別な人との出会いがある。人も誰かに出会わなければ、人生をよりよく進められないということだ。

第一話 関西人はツツコミが激しい

それは、俺にとって運命の出会いだったのかもしれない。

八歳の頃、俺は大震災で家族を失った。昨日までは、家族全員仲

良く食卓を囲み、他愛ない雑談を繰り返していたり、笑い合ったりしていたのに。それらを大自然は一瞬で跡形もなく奪い去ってしまった。

家は倒壊し、家族は全員瓦礫の下敷きに。たまたま小学校に行っていた俺は、多少の傷を負いながらも、命を失うことはなかった。しかし、俺の大切な人たちはすべて天国へと消え去ってしまっていた。

信じられなかった。いや、信じたくなかったただけなのかもしれない。今まで俺の隣で一緒に暮らしてきた家族が、誰一人残ってはいないという残酷な事実を。小学生如きの脆い精神で耐えられるほど、軽い衝撃ではなかった。

身寄りの無くなった俺は、父さんの親戚だという、とある家族の下へ預けられた。そこはとてつもない大金持ちで、凄まじい大きさの豪邸に連れて行かれた時は、子供だった俺でも度肝を抜かれた。この日本にこんなマンガみたいな家が存在したのかと、自分の目を疑いそうになったほどだ。

俺をそこに連れてきた男性は、玄関でいったん止まると、「娘を連れて来るから」と言っただけで家の中に入ってしまった。しばらくして、俺より二、三歳年下である少女を引き連れて戻ってくる。

男は少女の名前を【咲夜】と呼んだ。肩まで伸ばしたボブカットの少女は、鋭い目つきでこちらを見てくる。まるで、俺を品定めするかのように、じつくりと丁寧な。

「この子が今日から君の義理の妹になる、咲夜だ。人とは少し変わったところのある子だけど、良い子だから仲良くしてやってね」

「は、はあ……」

義理の妹、といわれてもいまいよく分からない。実妹がいなかったからというのもあるが、新しく家族になるという感覚自体、あ

まりよく理解できなかったのだ。

曖昧な返事を返す俺に、咲夜はふいつと横を向くとボソリと呟く。

「……はっ、こんなモヤシみたいなやつがウチの兄貴になるんかい」
「おいこら喧嘩売ってんのか」

突然の暴言だった。思わず掴みかかりそうになる。ふう、危ない
危ない。さっき義父さんによろしく言われたばかりじゃないか。
こんな最初っから家族中をギクシャクさせることはない。それにな
により、子供の言うことだ。気にしても仕方がない。

出しかけた手を慌ててひっこめると、乱れた息を整える。形だけ
でも年上の余裕というものを見せてやろう。

「………なんや自分、随分と余裕かましとるなあ。イラつかへん
のかい」

「小学校にも上がってないガキの言うことなんか一々気にしてられ
っかつての」

「自分かてまだ二年生やないか。大人ぶるなんてウチよりも子供の
証拠やで？ 成長しとんのは年齢だけかいな？」

「………お前、マジで殴るぞ」

「やれるもんならやってみんかい。返り討ちにしたるわ」

「……………」

まさに一触即発。お互いに拳を握り締めながらじつと相手を威嚇
し続ける。周りでは、彼女のお手伝いさんかと思われる数人の大人
たちがオロオロしながら様子を見守っていた。

俺達の険悪な雰囲気を見て、義父さんは「はあ………」と溜息をつ
く。

「君たちはどうして初対面でそこまで対立するかなあ……………」

『だってこいつが!』

「どっちも同レベルだって。……ふう、この仲だと、兄妹は難しいかなあ……。……仕方がない」

そう言つと義父さんは困つたように歪めていた顔をきりつと戻し、真面目な表情になると、とんでもないことを言つた。

「君は今日から、咲夜の専属執事になりなさい」

「はあっ!? 俺が、コイツの!?!」

「なんでやねん! なんでよりにもよつてこんなバカモヤシがウチの執事になるんねや!」

なんてことを言つてくれやがるのだろうか、この人は。よりもよつてこいつの執事だと!? 何を考えているんだ!

今にも掴み掛らんとする俺達二人に、義父さんは淡々と告げる。

「だって今のままじゃ兄妹としては到底やつていけないだろう?」

それなら、家族として引き取るんじゃなくて、咲夜の専属執事として、君を雇うつてことにする。それなら、家族とはまた違う方向から仲良くなれるだろうし。……あ、でも、戸籍上は僕の息子つてことになるからね? 大人の事情つて奴」

「なれるかい! こんなモヤシ、何百年経とうが好意なんて抱けるわけあらへん!」

「それはこつちの台詞だボケ狸。なんで俺がお前のお漏らし布団を掃除したりしないといけないんだ?」

「ぶはっ、だ、誰がそんなことするかい! ウチはもう立派な大人や! そんな子供みたいなこと……。……」

「おい、目え背けんなよ」

図星か、こいつ。

「そんなに文句言っても駄目だつて。これはもう決定事項なんだから。明日から君たちは執事とお嬢様。仲良くしなよー?」
『くっ……………』

役割にかこつけて絶対痛い目にあわせてやる。

俺も彼女も、明らかに顔にそう書いてあった。考えることは同じ
つてわけか………… おもしれえ。お転婆お嬢様の執事、やってやろうじ
やないか。

「それじゃ、よろしく頼むね? 愛沢タケルくん」

義父さんが優しく微笑みかけてくる。

これが俺の、お転婆お嬢様咲夜との出会いだった。

「……………い」

タケルの耳に、誰かの声が響いてくる。それはだんだんと大きさを増し、タケルの意識を泉の底から徐々に徐々に引き揚げ始めた。

「……………かい……………！」

(なんだよ……………俺はまだ眠いんだって……………)

はつきりと聞こえ始めた叫び声にも、タケルは動じずに再び意識を落とし始める。なんてずぶとい少年であろうか、愛沢タケル。明らかに自分と呼んでいる声にも拒否反応を示し、なおかつ二度寝に入ろうとするとは。

いつまでたっても目を開けないタケルに、とうとう叫び声の主がブチ切れた。

「はよ起きんかい！ この寝坊助執事がっ」

「へぶっ！」

振り下ろされるハリセン。それは何の邪魔も受けずに、タケルの顔面へと綺麗にクリーンヒットしていく。その切れ味はまさに熟練の芸人顔負けのレベルだ。

予想外の攻撃を受けたタケルは、痛む鼻を抑えながら暴行犯へと怒りを露わにする。

「なにすんだよ、咲夜？」

「おおー、めっちゃええリアクションやんけ。ナイスツツコミやで、タケル」

「ツツコミ以前にキレてんだよ……………！」

「まあまあ、別に減るもんじゃなしに、そこまで怒らんでもええやないか。この乾いた日常には潤った笑いが必要やねん」

「絶対そんなのじゃねえだろ、コレ……………」

すっかり目が覚めてしまったタケルは、ベッドの傍らに架かっている執事服の手に取ると、目の前に咲夜がいるのにも関わらず寝巻を脱いでいく。いきなり着替え始めた彼に、案の定咲夜は顔を真っ

赤にすると目を背けながら叫んだ。

「な、なんでウチが見とる前で着替え始めんねん！」

「は？　なんでって……別に昔から見慣れてんだから、別に恥ずかしがることなんてないからだろ？」

「そ、そういう問題ちゃうやろ！　こっ、年頃の女性の目の前で裸を見せるっていうのが、恥ずかしいんかい！」

「はあ？」

今更何言ってんだコイツ、というような表情でタケルは呆れたように咲夜を見る。もうかれこれ八年も一つ屋根の下で暮らしてきたタケルにとって、咲夜の前で着替えるなんていうのは日常茶飯事。

確かに咲夜は大人びてきて、美人になってきたと思うが、だからといって彼女の目の前で更衣することに抵抗を感じるかと聞かれると、彼の答えはノーである。大体、お互いに羞恥なんてあるものかと考えているくらいだ。

しかしタケルは思いついたようにニヤツとした笑みを浮かべると、ギリギリ咲夜に聞き取れるかどうかくらいの声量で、ボソツと呟いた。

「……っていうか、どこに年頃の女性がいるんだよ」

「……………（イラッ）」

思惑通り、咲夜は赤くなった顔を先ほどとは別の意味で赤く染め始める。怒る人間が噴火前の火山とはよく言ったものだ。まるで頭から湯気が出ているように錯覚する。

込み上げる怒りを必死に抑えつつも、咲夜はニコオツと歪な笑みを作る。明らかに爆発寸前だ。

「ま、またまたあ……タケルは冗談が上手やなあ。目の前にこんな

綺麗な美人さんがおるつちゅうに」

「あ？ 目の前？ ……狸面の関西弁ツツコミ大好きなガキじゃないが？」

「……………（こ、このアホタンが……………！ まじでドツいたるか……………！）」

ぎゅーっとハリセンを握り込む咲夜。あまりに強く力を入れたせいか、持ち手の部分は既にひん曲がってしまっている。

（い、痛い！ 痛いですよ創造主？）

そんなハリセンの心の気持ちも、怒り狂った咲夜の耳には届かない。というか、常識的に聞こえるはずがないんですけどね。

咲夜の心中を知ってか知らずか、タケルは遂に禁断の一言を發したのだった。

「つーか、こんな貧乳中学生が年頃なんて……………どこの世界の常識だよ、それは」

「……………だ……………」

「だ？」

いきなり謎の言葉をあげた咲夜に、タケルは首を傾げながら彼女の顔を見る。咲夜はキツと彼を睨むと、既にご臨終なさっているハリセンを思い切り振り上げ、再び顔面めがけてフルスイングで振り切った。

「……………誰が貧乳や、このバカチンがあ……………っ
？」

「ほじあつ？」

「ホークス日本一おめでとー？」とわけの分らないことを口走りつつ吹き飛ぶタケルに咲夜は「阪神バカにしとんのか、おお!？」と睨みつけながら追撃を加える。Z戦士顔負けのコンビに、タケルのヒットポイントはもうゼロだ。これぞオーバーキルである。

「ぐっふう……」

「はあっ……はあっ……ふうっ。今日も朝からええツツコミの練習ができたで。ホンマおおきにな、タケル」

ボロ雑巾のように床に横たわるタケル。そんな彼に、咲夜は彼女特有の太陽のような明るい笑顔で笑いかけたのだった。

愛沢家は、今日も朝から変わらず笑いに満ち溢れている。

第一話 関西人はツツコミが激しい（後書き）

咲夜「咲夜と！」

タケル「タケルの！」

二人『愛沢家通信？』

咲「さあ、ついに始まりました【愛沢家執事物語】。これは美少女たるウチが残念系執事のタケルと織りなすラブコメディーやで」

タ「ラブの要素はねえだろ。普通のコメディーだよ」

咲「主人公は【負け犬公園】で行き倒れていたところを、可憐な美少女咲夜によって救われるんや」

タ「普通に父さんに引き取られたつつの。てか、誰が美少女だ、誰が」

咲「最初はお互いに反発し合っていた二人。しかし、時間が過ぎるにつれて二人はどんどん親密になっていく……」

タ「そこだけは正解だからなんかツツコミづらいだろうが。もっとどっちかに寄れよ。ボケか、ガチか」

咲「……っと、もう時間が来てしまったようやな。残念やけど今

日はこのへんでお別れや」

タ「ネタが尽きたんだろぅが正直に言えつつつの」

咲「うっさいねん！ さっきからグチグチグチグチ……小姑か！」

タ「執事だよ！」

咲「ったく……とにかく、今日はこの辺で。また次回会いましょか」

タ「感想、待ってるぞ？」

咲「それでは次回も【愛沢家執事物語】お楽しみに？」

第二話 ジャッポー・チェンもスタント中に怪我をすることもある（前書き）

こんにちは。今日も元気なふゆいです。

今回はやつと咲夜以外の原作キャラの登場です。某借金執事は次

回かな？

とにかく、お楽しみください。

それではどうぞ♪

第二話 ジャック・チェンもスタント中に怪我をすることもある

「タケル、今すぐ迅速にマッハで出かける用意を済ますんや」
「唐突に何を言い始めるんだお前は……」

朝から咲夜によるツツコミの嵐で強制的に目覚めさせられたタケルが面倒くさそうな表情をする。咲夜は何故か、既に余所行き用の服をしっかりと着込み、今にも出かけようとする勢いだ。出オチとか、絶対に言ってはいけない。

「もう今年も今日明日で終わりやろ？ そろそろ年末のあいさつに行かないかん頃やなと思ってな」

「だからって朝から叩き起こすか？ 普通。出かけるだけなら巻田と国枝を連れて行けばいいじゃないか。別に俺じゃなくてもいいだろ？」

「確かにあの二人の方がボケボケな自分より優秀やけどな……」

「こら、自然な流れで人を貶すな」

「……今から行くところには、この前のクリスマスから新しい執事が来たらしいねん。せやから、自分のことも顔見せに行こか思ってな」
「……おい、まさか……」

咲夜の意味深な発言にタケルが苦虫を噛み潰したような顔になる。彼がそれほどまでに嫌がる人間。果たしてどんな人なのだろうか。タケルの反応に満足したように、咲夜はウインクしながら言った。

「せや。ウチの妹分、三千院ナギの家やで」

第二話 ジャッ○ー・チェンもスタント中に怪我をすることもある

十分後。

タケルと咲夜は、東京都練馬区にそびえ立つ大豪邸の前に到着していた。

「毎度毎度思っただがどうやったら大阪から東京まで十分で着くんだよ……」

「そんな細かいこと気にしたらあかんで？ この小説はご都合主義の塊なんやから」

「そりゃそうだけどさあ……」

納得がいかない、という風に肩をすくめるタケル。まだ本編が始まったばかりだからか、彼もなかなかこの小説の仕様に慣れないようだ。まあ、いずれ慣れるだろう。

「……うし。そんじゃ、今日は窓から飛び込んでみるか」

「それはお嬢様として言うてはいけない台詞じゃねえか？ 普通に玄関から入れよ」

「ふっ……タケルは相変わらず笑いが分かん奴やなあ。普通に入って何がおもしろいねん！ 自分はアレか？ リアクション芸人がレストランで普通に飯食って『美味しいですねえ』って言うだけのバラエティ番組がおもしろいとも言うつもりかいな！？」
「たとえば分かりにくいんだが……とりあえずお前が生粋のバカだということとは分かった」

どこの世界にスタントマン顔負けのアクションを率先してやる金持ちがいるのだろうか。さすがは愛沢咲夜。三度の飯よりお笑いを愛する生粋の関西人だ。相方がドン引きしているにも関わらずいつの間にか敷地内に入り、丁度居間に突貫できるくらいの高さにある木に縄をくくりつけている。

「——つて、お前いつの間にそんなところに！？ 相変わらず行動力だけは人一倍だな！」

「……あー、マリアさん？ ウチやウチ、咲夜や。今ナギおるやろ？ 早く変わってくれへん？」

「ここまで人を無視できるのも一種の才能だな……」
(まあいいや。俺は俺で、さっさと屋敷の中に行こう……)

はあ、と嘆息し、正面玄関へと向かおうとするタケル。執事である身でありながらも主人を放っておくところがなんと彼らしいが、
……しかし、

「ん？ どこ行こうとしてんねん、タケル」

「どこって……真っすぐ入ろうとしてるんだが？」

「何訳分からんこと言ってるねや。自分もウチと一緒にターザンするんやで？」

「………は？」

衝撃発言、パート2。

今このご主人様はなんておっしゃりやがりましたか？

「だあーかあーらあー？ お前も飛び込むんや！ ウチと一緒に！ ナギのところへ！」

「無茶言っな！ 地球上の全員が全員ギャグ補正でできているとは思っなよ！？ 全身コメディーのお前と違って俺は一般人なんだ！」
「誰が全身コメディーや！ ウチかて十四歳のか弱い女子やっちゅうねん！ 自分よりも更に打たれ弱いわ？」

「じゃあするなよ！ なんでわざわざジャ○キー・チェン風に登場したがるかなあ！？」

「おもしろいやる？」

「結局それか！」

愛沢咲夜、十四歳。お笑いのためなら命さえも賭ける芸人である。
まあ、面白そうだから二人とも早くやっちゃいなYO

「ナレーショオオオソツ？ 他人事だと思って無茶ぶりするんじゃねえ——っ？」

「あーうるさいうるさい。ええ加減覚悟決めえや」

先ほどまでナギと電話をしていた咲夜が、いつの間にかタケルを担ぎ上げて木の上へと登っていた。なんという腕力。これも笑いのなせる力なのだろうか。

「よし、ほな、『一、二、三、ダー！』で行くからな」
「そこまで凝るのかよ……」

文句を言いながらも、仕方なくロープにしがみつく。本来一人用の縄である為か、無意識のうちにタケルの眼前には咲夜の頭が接近

していた。

同時に香ってきた彼女の香りに、不覚にもドキッとしてしまう。

（あ……なんか、滅茶苦茶良い匂いが……………）

「ダー？」

「うっそいつのまに三秒数えてギャ——？」

珍しく彼女の女らしさを実感したにもかかわらず、容赦なくやってくるリアクションタイム。人生で一度あるかどうかの恐怖がタケルの全身を支配していた。そりやそうですね。窓に突っ込んでいるんですし。

「アホ——？ 一方的に電話切んなボケ——？」

「ああもう演技に入ってらっしゃいるんですね……」

もうどうにでもなれ。涙目で必死に縄にしがみつくタケル。暴走機関車の如く走り始めた彼女を止められないことは、彼が一番よく知っていた。

そして自然な流れで、ガッシャーン？ と激しい破壊音と共に屋敷内へと進入を成功する。

ズザザアアアアアッ？ ↑ 咲夜が華麗に床へと着地する音

ドゴシャアッ？ ↑ タケルが勢いよく床に叩きつけられる音

「しゃべられへんやないかい？」

「がはっ……………」

ビシッと決める咲夜。倒れ伏すタケル。そして、若干引いた感じの目で二人を見るナギとマリア。

そりゃ、いきなり窓から人が飛び込んで来ればそういう反応にもなるものだ。実際、警察を呼ばなかっただけマジであろう。

予想外の白けた空気に、咲夜は「はぁ」と溜息をつきながら服に付いた埃を払っていく。

「あかん。やつぱちよつと間が遠かった。間が。一応二回つつこんでみたんやけど蘇らすことはでけへんかったわ。今のはなかったことにしといて。」

ちよつとマリアさん！　ウチ、アールグレイ？　アールグレイ持つてきて？　早く？」

衝撃的な登場もなんのそのと咲夜は言った様子で我が物顔で注文を始める。常識人のマリアさんもただただ苦笑いだ。

そして、彼女に業を煮やしたのか、怒り心頭のナギといつの間にかザオ○クで復活を果たしたタケルが、二人そろって咲夜の頭頂部へと同時にアールグレイをぶっかける。もちろん、アツアツだ。

案の定、頭を押さえて絨毯の上を転げまわる咲夜。

「あつつ？　マジであつつ？　あかんてそれ熱湯やん熱湯？　少し又ルめにしといてくれんとリアクション取りにくいつて？　マジで？」

「十分に取れてるから安心しろ。後ついでに死んでくれ」

「流石は咲夜。どんなときでもリアクションが輝いてるな。んで、そのまま死んでくれ」

ヒロインに熱湯をぶっかけたにも関わらず、主人公と金髪ツインテールは虫けらを見るような目で咲夜を見下ろす。最早お金持ちの威厳もクソもない光景だが、咲夜の自業自得なので周囲の人間は何も言わない。マリアもただただ苦笑するのみである。

一分ほど転げまわったところで、ようやく咲夜が復活を遂げた。

相変わらずの蘇生力だ。さすがは関西人。

「さすが、ウチの未来の相方達はツツコミが容赦あらへんなあ〜」
「いや、未来でも相方じゃねえし」

「ていうか窓から入ってくるなよ？ どーすんだよ人の部屋グチャグチャにして？ 片付けるこっちの身にもなれ？」

「片付けるのは私なんですけどね……」

諦めたように呟くマリア。ここからも彼女の日々の苦勞が受け取れる。こんなに苦勞しているから年齢より老けてみられるのだろうか。

「……あら？ 今何か失礼なナレーションが……」

気のせいです。

「ああ、それなら心配あらへんで。タケル？ 後片付けを！ 来たときより美しくが合言葉や？」

「結局俺も片づけるのかよ……」

ぶっ壊したのは咲夜なのに……とグチグチ言いながらもマリアと共に片づけを開始するタケル。これもいつものことなので、彼らは今更切れたりはいしない。執事とメイドというのは常に主人に振り回されるものなのだ。

「すみませんマリアさん。いつもうちの愚妹がご迷惑をおかけして……」

「いえいえ。もういつものことですから気にしてませんよ」

「いや、それはそれで申し訳ないんですが……」

いたってニコニコした様子で笑うマリアに、タケルは冷汗を流しながら苦笑する。

ちなみに先ほど咲夜が蹴り割った窓ガラスであるが、日本円に換算するとウン百万したりする。生まれが一般家庭のタケルにとってそんな高価なものを毎回のようにぶち壊してしまっているという事実はなかなか重たい現実だった。貧乏性な主人公でスマン。

「で？ 親戚であるところの愛沢家の長女が一体なんの用だ。まさか年末の挨拶つてわけでもあるまい」

「いや、あくまで建前上は挨拶やつたんやけどな。それよりも先に言いたいことがあってん」

「そんなことのためにわざわざ……大体、年明けまでスイスにいるんじゃないかったのかよ」

「チーズフォンデュは食べ飽きちゃって……」

食べ飽きたから帰ってきた。まさにお金持ちの台詞だろう。タケルならたとえ死ぬほどチーズフォンデュを食べても長期滞在を望むだろう。せつかくの海外旅行なんだし。

「それと一緒に行くはずやったヤツもドタキャンしよったし……」

「だって咲と一緒にじゃ飛行機落ちちゃうじゃん」

衝撃事実発覚。愛沢咲夜と一緒に飛行機に乗るともれなく墜落体験が付いてくるゾ

「な？ 落ちるかあ？ 落ちてたまるかあ？ そこまで笑いの神は降臨してへんわ？ つーかナレーションも余計なこと言っな？」

「……実際、どうだったんですか？」

「……二、三回、エンジントラブルで墜落しかけました。絶対コイツのせいですね」

「……………（ふいつ）」

「オイ目を逸らすなバカ咲夜」

激昂して叫ぶ咲夜の背後で、片付けに勤しみながらマリアがタケルに確認を取る。どうやら、咲夜は余程笑いの神に愛されているらしい。まあ、関西人なら本望であろう。

「……………それに付き合わされて同じ目に合う俺の気持ちにもなってみる」

それは主人公の特権ですから。

「あ、そう……………」

「それに一緒に行った伊澄はどうした？　一緒に帰ってきたのか！？」

「伊澄さんはボーっとしていたのでマッターホルンに置いてきました」

「お前なあ？　人の親友を捨ててくるな？」

『（その親友を落ちるかもしれない飛行機に乗せたのかよ（かしら）……………）』

あっけらかんと言いつ放つ咲夜をナギが怒鳴りつける。その近くで執事とメイドが「似た者同士だ……………」と思っているのは当然気付いてないだろう。おめでたい人たちだ。

「あ、そうそう。マリアさん。そういえばこの屋敷に新しい執事が来たって……………」

「あー、ハヤテくんのことですね？　今は中庭でシクラメン植えるために頑張って土耕していますよ」

「相変わらず変なところで庶民的な家ですね、ここ」

シクラメンを植えるために人力で土耕……機械を使えば一発で終わるだろうに。金持ちの考えることは分からない。

「とりあえず、挨拶ついでにそのハヤテってヤツのところに行ってきますよ。このままじゃ馬鹿義妹が暴走して人殺しになりかねませんので。……あ。後片付け、任せちゃっても大丈夫ですかね？」

「平気でさらつとんでもないと言いますね……。あ、はい。大きな破片は粗方片付け終わっているので、大丈夫です。それよりもせつかく決まった新しい執事が殺されないように見守ってくださいね？」

「りょーかいっす」

もはや一般的な会話ではない気がする。なぜ普通の中学生が関わることで人一人の命が左右されるのだろうか。これが金持ちクオリティーってやつなのだろうか。

しかし彼らはいつものことであるかのように、なんでもなく振る舞う。主人が主人なら従者も従者である。

ひらひらと手を振って見送るマリアを後にし、タケルは三千院けの新しい執事だという少年の所へと足を進めた。

第二話 ジャッ○ー・チェンもスタント中に怪我をすることもある（後書き）

咲夜「咲夜と！」

タケル「タケルの！」

二人『愛沢家通信？』

咲「いやー、今回も華麗に登場やったなあ」

タ「スタントマンもびつくりな突撃を見せたただけだな」

咲「しっかしそれもこれもあの馬鹿ナギがウチとの婚前旅行をバツくれたからやで……まったく」

タ「単なるやつあたりじゃねーか。しかもナギの言った通り飛行機はマジで落ちかけたし……逆にアイツの予想力に脱帽だよ。死ぬかと思っただわ」

咲「う、うるさいねん！ ウチかてまさかホンマに笑いの神様が降りてくるとは思わへんかったんや？」

タ「伊澄はマッターホルンに捨ててくるし……今頃鷲ノ宮家は大慌てだぞ。どこかのパラレルワールドの伊澄大好き妹馬鹿が聞いたら荒れ狂うだろうな」

咲「ま、まあそれはしゃーないねん。笑いに犠牲は付きものやさかい」

タ「そんなもんかねえ……」

咲「お、どうやら今日はここまでのようやな」

タ「感想・質問・応援、どんどんお待ちしてるからな」

咲「そんじゃまた次回、後書きでお会いしまひよ」

二人『さよーならー?』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554y/>

ハヤテのごとく！～愛沢家執事物語～

2011年11月24日20時46分発行